XIV. ● 死と天皇——民衆史を越えて——（3）

XIV-1　純文学者の自然

✹　純文学者にとって、国家＝堤防は低いものでなければならなかった。

→　自然のなかで、勇気とともに生きる（死を、孤独を、戦いを恐れない）。

✹　二人の戦争イデオローグ

①　保田與重郎……自然とは言霊。ひとつの理想・あこがれ、具体的には同殿共床。

→　敗北する日本のために死ぬ若者にせめて「意味」を求める（民衆の死を讃える……）。

②　小林秀雄……自然とは直毘霊。現実。

→　民衆は「黙って事変に処」す（たとえ日本が敗北しても、日本人は死なない）。

【ひとつの問い】

天皇は言霊なのか、直毘霊なのか。いいかえれば、天上（理想）にいるのか、それとも地上（現実）にいるのか。

XIV-2　不死の民衆／死ぬ若者

国学の学徒の部隊（イクサ）／たゝかひに　今し出で立つ。

国学の学徒は、若く／いさぎよき心興奮（ホコリ）に、

白き頬　知識に照り／清きまみ　学に輝く

……

汝（イマシ）が千人（チタリ）　いくさに起（タ）たば、／学問は　ここに廃（スタ）れむ。

汝（イマシ）らの千人の　一人／ひとりだに生きてしあらば、

国学は　やがて興らむ。

……

折口信夫「学問の道」『院友会会報』昭和 18 年 10 月（国学院大学学徒出陣壮行会、同年 11 月 14 日）。

→　国家のために死ぬことが推奨された時代、彼はひとり、国家のために生きて帰れという。なぜこんな言葉を吐くことが可能だったのか。その論理を追ってみよう。

【生きているのか、死んでいるのか】

古代には、死の明確な意識のない時代があつた。平安朝になつても、生きてゐるのか、死んでゐるのか、はつきり訣（わか）らなかつた。

折口「古代人の思考の基礎」一九二九年。

→　死は長い殯（もがり）によって確定されねばならなかった。貴族ほど長い期間を要し、庶民は適当な日に埋めた（「貴人は三年外に殯し、庶人は日を卜してうづむ」『隋書』東夷伝倭国条）。

①　貴族は死を確定させるまで時間を取る。**貴族は死ぬ能力をもつ。**

②　庶民は死んだかどうかわからないあいだに埋められるということ。**民衆は死ぬ能力をもたない。**

Cf. エルンスト・カントローヴィチ『王の二つの身体』の誤謬。王は不死の身体をもつのではなく、社会的に死ぬことが推奨される存在者。

→　**かけがえのなさは、死に宿る。**

XIV-3　かけがえのなさ

神こゝに　敗れたまひぬ。しづかなる青垣／山も　よるところなき

國びとの思ひし神は、大空を行く飛行機と／おほく違はず

信薄き人に向ひて　恥ぢずゐむ。敗れても／神はなほ　まつるべき

折口信夫「神　やぶれたまふ」『近代悲傷集』1952 年

→　国民の信じていた神は、いつのまにか、大地を離れ、飛行機と変わらぬものになってしまった。地上の破壊を破壊とも思わず過ぎていく、地上に場をもたぬ、ジュラルミンの翼をもった、飛行機としての神。

→　折口信夫にとって、《神》とは？

神こゝに　敗れたまひぬ―。

すさのをも　おほくにぬしも／青垣の内(うち)の御庭(みには)の／宮出でゝ　さすらひたまふ―。

くそ　嘔吐(タグリ)　ゆまり流れて／蛆　蠅(ハヘ)の　集(タカ)り　群立(ムラダ)つ

直土(ヒタツチ)に―人は臥(コ)い伏(フ)し／青人草(アヲヒトグサ)　すべて色なし―

→　折口にとっての神は、大地に根ざす、スサノヲやオオグニヌシ。

→　天皇と「系図のつながる神」であるアマテラスの君臨する高天原を他界とする見解を批判。「国家以前」の日本人の生活する《大地》として、海を重視。

……日本人の場合、海を背景とする地域に長く住み、其後も又、ある部分は、海の生活を続けたのだから「海」に他界がないとすることは、我々の採らうと思はぬ方法である。其と同時に、海を離れて山野に住んだ時期の伝承ばかりを持つと思はれる日本人だから、高天原他界説が正しいと言ふのも、単に直感にのみ拠つてゐないだけに信じたい気が深く動くが、此とて日本国家以前・日本来住以前の我等の祖先の生活を思ふと、簡単に肯ふことは出来ない。

折口「民族史観における他界観念」1952 年

Cf. 柳田國男の他界観（「先祖の話」、「魂の行くえ」）

私がこの本の中で力を入れて説きたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、おそらくは世の始めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。

……死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから、永く子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉とを顧念しているものと考えだしたことは、いつの世の文化の所産であるかは知らず、限りもなくなつかしいことである。

✹　未成霊

沖縄の神道では、「三十三年にして神を生ず」と言つて、死人は此だけの年月がたつと、神化するものと見てゐた。年月に異動はあつても、日本近代の民俗では、やはり亡者を何時までも宙有に迷つてゐなければならぬものとしてゐた訣ではない。僧家の手に管理を委ねた亡霊の中、実は年期既に到つたものすら、永久と言ふ長い時に渉つて、成仏の時の到り難いものがあつた。其をつい失念して、一度死んだ人間は、永へに仏の栄光に預り、仏性を得ることが出来ぬものゝやうに考へてしまつたものである。此は実は供養に廻向に礼を尽す情熱が、そんな風に、いつまで経つても、善き児孫の心に甘え、其を脱して独立の光明世界に生じようとせぬ亡霊ばかりと言ふ風に思ひ違ひをさせたのであらう。此は我々民族の持つ迂遠なる循環性と、僧侶たちの仏教が、いつまでも儀礼を脱却することに努めな

かつた為でもある。

折口信夫「民族史観における他界観念」1952 年

→ 戦後、遠い海の果てに散った若者たちをいかに弔うかを重要な主題に。近代化された靖国神社はもちろんのこと、死者は祖国を離れないとみた柳田の視座では不十分。

→ 若者＝未熟な魂（「未成霊」。「完成霊」ではない）。本来、未熟な魂はこの世に念を残して成仏できない。明治神道・靖国神社においては、死ねば即神に。

未成霊の所在は、何処と考へたものか。此も明らかではないが、推察の論理だけは辿られさうである。…若者―未成年である間に死んだものは―先に述べた浄罪所―煉獄のやうな所にゐることになつて居るらしいが、近代では未婚者を以て、若者・未成年者などのすべてを表示するが故に、未婚の児女は…賽ノ河原に集り、石の塔を積むと言ふ。

「民族史観における他界観念」

→ 室町時代に生まれた賽の河原信仰。幼子が石積みをし、鬼に虐められているという。夭折した幼子や早世した青少年は家や集落の共同の墓地には埋葬されずに、集落の境界、村境に葬られた。寿命を全うしなかったのであり、いち早い再生・生まれ変わりを願っただろうが、逆縁であるために、成仏できない不浄の霊であり、邪霊となって災いをもたらすことを恐れられもした。

✹ 折口春洋の死

我どちにかゝはりもなきたゝかひを　悔いなげゝども、子はそこに死ぬ
たゝかひに果てにし子ゆゑ、身に沁みて　ことしの桜　あはれ　散りゆく
たゝかひに死にしわが子の　果てのさま－委曲に思へ。苛き最期を
戦ひにはてし我が子のかなしみに、国亡ぶるを　おほよそ見つ
愚痴蒙昧の民として　我を哭かしめよ。あまり惨く　死にしわが子ぞ
いきどほろしく　我がゐる時に、おどろしく雨は来たれり。わが子の声か

『倭おぐな』

→ 大東亜共栄圏の夢ははかなく潰えた。

→ 硫黄島で死んだ養嗣子、春洋（旧姓藤井）を悼んで詠まれた歌。

【念仏踊り】

念仏踊りは、大体二通りあつて、中には盆踊り化する途に立つてゐるものがある。だが其何れが古いか新しいかではなく、念仏踊りの中に、色々な姿で、祖霊・未成霊・無縁霊の信仰が現れてゐることを知る。墓山から練り出して来るのは、祖先聖霊が、子孫の村に出現する形で、他界神の来訪の印象を、やはりはつきりと留めてゐる。……一方、古戦場における念仏踊りは、念仏踊りそのものゝ意義から言へば、無縁亡霊を象徴する所の集団舞踊だが、未成霊の為に行はれる修練行だと言へぬこともない。なぜなら、盆行事（又は獅子踊）の中心となるものに二つあつて、才芸（音頭）又は新発意と言ふ名で表してゐる。新発意は先達の指導を受ける後達の代表者で、未完成の青年の鍛錬せられる過程を示す。……このやうに、魂の完成は、死者の上にのみ望まれたことではなく、生者にも、十分行はれてゐなければならぬことであつた。生前における修練が、死後に成果を発するものと考へられて来る。

「民族史観における他界観念」

→ 未熟なうちに非業の死を遂げた若者たちへの、折口の切なる願い。

→ 本来なら、万人から祝福されて祖裔の連鎖に組み込まれるべき、本質からして美しい、すべての若者のうちの幾人かが、時代や社会の都合により、あるいは自然の気まぐれにより、連鎖からはじかれ、成熟を迎えることなく死んで、魂の行き場所を失ってしまう。そんなあわれな若者に対して、この世の内部に《場》を与え、現世の神にしようとするのは誰なのか。それは、この世に残された者の、過剰な同情。そもそも神といい霊魂といい、それらは、残された生者による、死者への同情が生み出す幻影。

→ その同情が深ければ深いほど——折口の春洋に対する愛がそうであるように——、霊魂は成仏できずにこの世に《場》を得て——たとえば山に——現前し、あわれな霊魂は厳しい修練を課され、あるいは恐ろしい祟り神にされ、さもなければいつまでも護国の重責を背負わされることになる。

→ あわれな未成霊。未成霊は、生物学的には死んでいても、生者の同情によって、社会的な死の能力を欠いている。

XIII-4　自由の彼方

空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬと一友人が云つた事は確かです。操縦桿を採る器械、人格もなく感情もなく勿論理性もなく、只敵の航空母艦に向つて吸ひつく磁石の中の鉄の一分子に過ぎぬのです。……

飛行機に乗れば器械に過ぎぬのですけれど、一旦下りればやはり人間ですから、そこには感情もあり、熱情も動きます。愛する恋人に死なれた時、自分も一緒に精神的に死んで居りました。天国に待ちある人、天国に於て彼女と会へると思ふと死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません。明日は出撃です。過激に亙り、勿論発表すべき事ではありませんでしたが、偽はらぬ心境は以上述べた如くです。何も系統だてず思つた尽を雑然と述べた事を許して下さい。明日は自由主義者が一人この世から去つて行きます。……

上原良司。特攻隊員として沖縄にて戦死。二二歳。『きけわだつみのこえ』一九五二年。

娑婆よりの最後のおとづれを書かうとしてペンを執つたが、千万言胸に溢れて言葉を知らない。君の手紙や電報は四日、香椎(かしい)に帰つてから見た。二十八日の夜香椎駅の夕闇をすかして私を探した君の姿を思ひ浮べて誠にすまないと思ふ。

君は姪の浜や新宮の浜の様な美しい砂浜にどこまでも続いてゐる足跡を見た事があるだらう。藤村か誰かの詩にそんな光景を歌つたのがあつた様に思ふ。私はそこに交り合つた数条の足跡が我々であつた様に思ふ。どこに始つてどこに終るかもしれない。どこに交つてどこに別れるかも知れない。そこはかとなく悲しいものは浜辺の足跡である。

浪に消される痕であつても、足跡の主の力づよい一足一足が覗かれる。もり上つた砂あとに立去つた人の逞ましい歩みを知る時、私は力づけられる。誠に我々は過去を知らず、未来を知らない。然し現在に厳然と立つ時、脚に籠る力を知る。

中尾武徳。神風特攻隊員として南太平洋で戦死。二二歳。

→ 折口には耐えられなかった、あまりにあわれな、最前線の死。それは、名ある者のみ許された存在のかけがえのなさ、という、前近代的固定観念を動揺させる。数ならぬ身、不死であるはずの民衆が、死の能力を獲得する——そのプロセスこそ、大東亜戦争だった。

→ 民衆が死の能力をもつ、そのことが、ほんとうの意味での民主主義を可能にする。